

# 沿岸漁海況調査（昭和52年度）

山本達雄・野沢正俊・西田輝己

本県沿岸の海況及び漁況の変化・変動を把握するため、沿岸海洋観測（4～11月）及び漁獲量調査（周年）を実施したので報告する。また、本調査の資料整理をしていただいた博田真希子氏に謝意を表する。

## 調査方法

### 1 海況調査

- (1) 調査船 第2鳥取丸（FRP 17.84 吨、D 160 馬力、10.5 ノット）
- (2) 観測定点 図1
- (3) 調査項目  
気象：天候、気温、風向、風力  
海象：水温、塩分、透明度、ウネリ、波浪、波向、潮目

### 2 漁況調査

網代、泊及び赤碕の各漁業協同組合に水揚げされる毎日の漁業別、魚種別漁獲量を収集し資料とした。

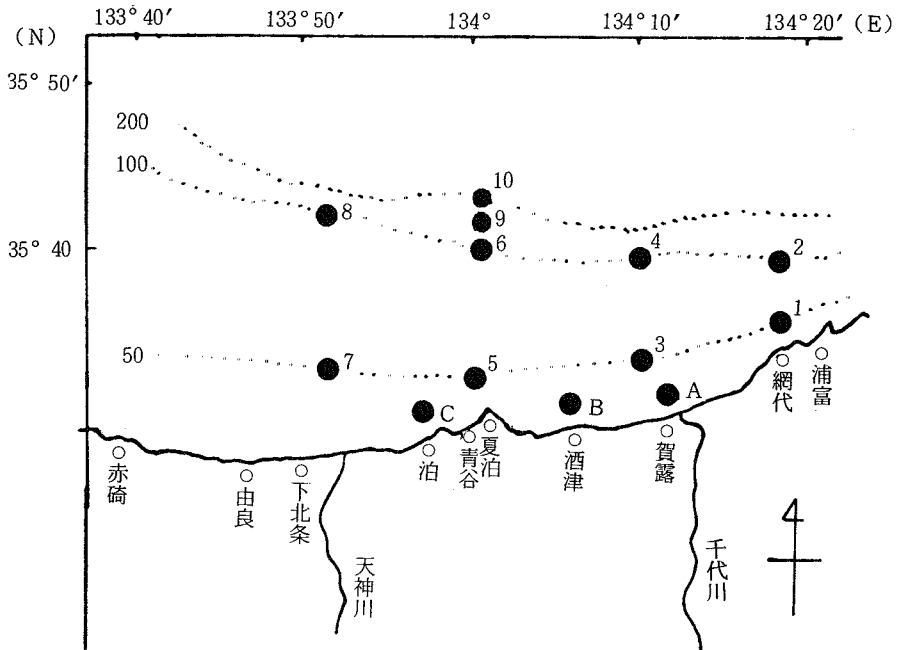


図1 海洋観測定点

表1 海洋観測実施概要

調査年月日	調査船	測定数	欠測点数	備考
昭和52年4月4日・5日	第2鳥取丸	13	0	
5月9日・10日	〃	13	0	
6月1日・2日	〃	13	0	
7月7日・8日	〃	13	0	
8月1日・2日	〃	13	0	
9月1日・2日	〃	13	0	
10月5日・6日	〃	13	0	
11月16日・25日	〃	10	3	st.7, 8及びstc欠測

## 結果及び考察

### 1 海況

図1に示す定点を4～11月に海洋観測を実施し、その概要を表1に示す。また、0m層、50m層及び100m層の各月のst.1～st.8の平均水温及び平均塩分を図2～4に示す。

なお、月別・定点別観測結果は昭和51・52年度鳥取水試資料Aに掲載する。

#### 海況の特徴

水温は平年に比べると、0m層は4月及び7月が“やや低め”であった他は“平年並み”か“やや高め”で推移した。ただ、7～8月には急激な昇温傾向がみられ、0m層では“かなり高め”に、50m層では“やや低め”から“かなり低め”に推移していたものが“平年並み”となった。しかし、50m層は9月には再び“かなり低め”の海況となった。また、青谷沖200m層には5～11月まで冷水の張り出しがみられた。

塩分は0m層、50m層及び100m層とも6月が最も高く、最低は0m層は7月、50m層は10月及び100m層は11月であった。また、各定点間のバラツキは0m層は7月が、50m及び100m層は8月が最大であった。

#### 海況の推移

4月：水温は0m層が11.6～13.2℃、50m層が11.21～11.90℃、100m層が11.00～11.90℃、200m層が8.2℃である。100m層までは、ほとんど温度差はみられない。昨年同期と比べると0m層はst.7が0.1℃低い他は0.1～1.1℃高く、50m層はst.1、4、6が0～0.4℃高く、他は0.3～0.5℃低く、100m層はst.8が0.2℃低い他は0.2～0.4℃高くなっている。平年(1964～1975年の平均)と比べると0m及び50m層は“やや低め”に、100m層は“平年並み”に推移している。

塩分は、0m層は33.08～34.59‰、50m層は34.48～34.59‰、100m層は34.50～34.58‰である。0m層は50m層及び100m層に比べバラツキが大きいが、これは、st.1及びst.3で河川水の影響とみられる33.08～33.48‰の低塩分のためである。昨年同期の50m及び100m層に比べると0.1～0.2‰高塩分となっている。

透明度は水深50m海域の定点(以後沿岸域という)で11～19m、水深100m海域の定点(以後沖合域という)で20～26mとなっている。

5月：水温は、0m層は4月上旬に比べ、3.3～4.7℃高めとなって15.8～17.1℃、50m層は2.4～

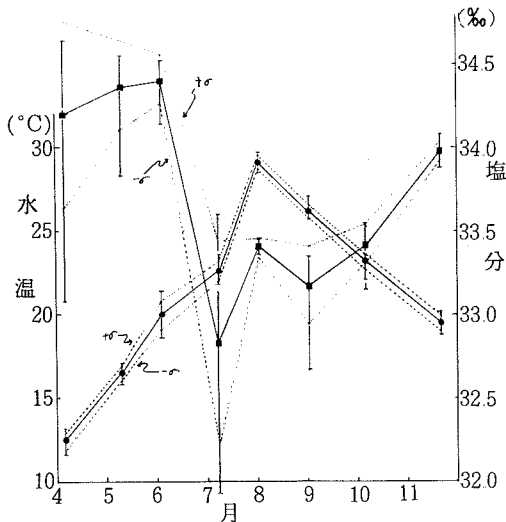


図2 昭和52年の鳥取県沿岸の0m層の平均水温及び平均塩分の経月変化  
 注) ●—● 水温 ■—■ 塩分  
 ..... ±σ : st. 1~8の標準偏差を示す

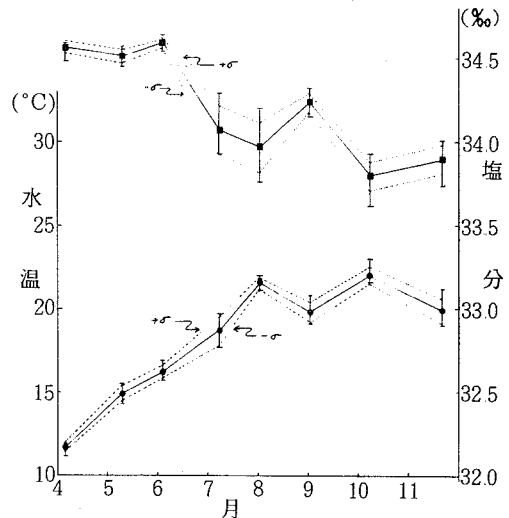


図3 昭和52年の鳥取県沿岸の50m層の平均水温及び平均塩分の経月変化  
 注) ●—● 水温 ■—■ 塩分  
 ..... ±σ : st. 1~8の標準偏差を示す

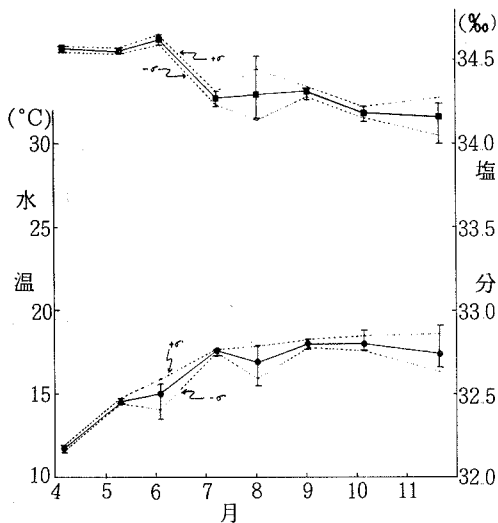


図4 昭和52年の鳥取県沿岸の100m層の平均水温及び平均塩分の経月変化  
 注) ●—● 水温 ■—■ 塩分  
 ..... ±σ : st. 1~8の標準偏差を示す

3.7℃高めとなって沿岸域が15.30～15.46℃、沖合域が14.37～14.84℃、100m層は2.5～3.3℃高めとなって14.25～14.72℃となっている。st.10の200m層には5℃台の冷水がみられる。昨年同期と比べると0m層は東部(長尾鼻以東)では0～0.6℃低め、西部(長尾鼻以西)では0～0.8℃高め、50m層は沿岸域が0.5～1.1℃高め、沖合域はst.8が0.5℃高めの他は0.2～0.4℃低めである。100m層は東部が0.2℃低め、西部は1.0～3.8℃高めとなっている。平年と比べると0m及び50m層は“平年並み”か“やや高め”に、100m層は“やや高め”に推移している。

塩分は、0m層は4月上旬同様st.1及びst.3が33.83～34.03‰と低塩分水である他は34.43～34.59‰である。50m層は34.45～34.57‰、100m層は34.54～34.59‰である。

透明度は12～20mで沿岸域が4月上旬よりやや高くなっている。

6月:水温は、0m層は5月上旬に比べ、2.7～4.5℃高めとなって18.6～20.8℃、50m層は0.4～1.6℃高めとなって14.78～16.93℃、100m層はst.3、st.9及びst.10が0.6～1.1℃低め、他は0.7～1.0℃高めとなって13.17～15.63℃となっている。st.10の200m層は5℃台の冷水の張り出しがみられる。昨年同期と比べると0m層はst.5が0.4℃低めの他は0～1.9℃高めであり、50m層はst.3が0.5℃高めの他は0.1～1.0℃低めであり、100m層は0.4～2.5℃低めである。平年と比べると0m層は“平年並

み”か“やや高め”、50m層は“やや低め”か“かなり低め”、100 m層は st. 4 (かなり低め)を除くと“**平年並み**”に推移している。

塩分は、0 m層は st. 1 及び st. 7 が 34.14 ~ 34.18‰ とやや低い他は 34.44 ~ 34.52‰ と高塩分水となっている。50m層は 34.52 ~ 34.64‰、100 m層は 34.57 ~ 34.65‰ で、各層とも 4 ~ 11月では最高塩分値を示している。

透明度は st. 1 が 12m であった他は 17 ~ 25m と高くなっている。

**7月**：水温は、0 m層は 6月上旬に比べ、1.7 ~ 4.1℃ 高めとなって 21.8 ~ 23.6℃、50m層は 1.8 ~ 3.4℃ 17.68 ~ 19.68℃、100 m層は 1.8 ~ 4.0℃ 高めとなって 16.71 ~ 17.66℃ となっている。st. 10の 200 m層には 4℃ 台の冷水がみられる。昨年同期と比べると、0 m層は 0 ~ 0.8℃ 高め、50m層は st. 4 (0.2℃ 低め)を除いて 0.1 ~ 1.4℃ 高め、100 m層は 0.6 ~ 3.3℃ 高めである。平年と比べると、0 m層は“**平年並み**”か“**やや低め**”50m層は“**やや低め**”か“**かなり低め**”、100 m層は“**平年並み**”に推移している。

塩分は、0 m層は 31.93 ~ 33.60‰ とかなりの低塩分水となって定点間にバラツキがみられる。50m層及び 100 m層も 6月上旬より低塩分となり、50m層が 33.90 ~ 34.29‰、100 m層が 34.22 ~ 34.39‰ である。

透明度は 11 ~ 26m である。

**8月**：水温は、0 m層は 7月上旬に比べ、5.7 ~ 7.3℃ 高めとなって 28.5 ~ 29.7℃、50m層は 1.5 ~ 4.1℃ 高めとなって 20.72 ~ 22.02℃、100 m層は 東部は 0.1 ~ 1.3℃ 高め、西部は 0.2 ~ 1.8℃ 低めとなって 15.45 ~ 17.86℃ となっている。st. 10の 200 m層には 5℃ 台の冷水がみられる。また、水深 20 ~ 30m に水温躍層がみられる。昨年同期と比べると 0 m層は 2.8 ~ 4.2℃ 高め、50m層は st. 3 (1.4℃ 低め)を除いて 0.4 ~ 2.9℃ 高め、100 m層は 昨年かなり高かった st. 2 が 0.5℃ 低い他は 0.8 ~ 2.5℃ 高めである。平年と比べると 0 m層及び 50m層は 急激な昇温傾向を示したため、0 m層は“**かなり高め**”、50m層は 回復して、100 m層とともに“**平年並み**”に推移している。

塩分は、0 m層は 33.36 ~ 33.50‰、50m層が 33.76 ~ 33.20‰、100 m層が 34.15 ~ 34.52‰ となっている。各定点間のバラツキは、7月までと異なり、0 m層が最も小さくなっている。また、水深 10 ~ 30m に塩分躍層がみられる。

透明度は 19 ~ 27m で大部分が 20m 以上と高くなっている。

**9月**：水温は、0 m層は 8月上旬に比べ、2.2 ~ 3.6℃ 低めとなって 25.7 ~ 27.1℃、50m層は 0.6 ~ 2.9℃ と低めとなって 18.95 ~ 20.84℃、100 m層は 0 ~ 2.8℃ 高めとなって 17.63 ~ 18.29℃ となっている。st. 10の 200 m層には 4℃ 台の冷水の張り出しがみられる。また、水深 10 ~ 20m に水温躍層がみられる。昨年同期と比べると、0 m層は 0.2 ~ 1.6℃ 高め、50m層は st. 2 及び st. 4 が 0.2 ~ 0.3℃ 高めの他は 1.3 ~ 3.8℃ 低め、100 m層は 0.7 ~ 2.3℃ 高めとなっている。平年と比べると、0 m層及び 100 m層は“**平年並み**”、50m層は“**かなり低め**”か“**甚だ低め**”に推移している。

塩分は、0 m層は 32.30 ~ 33.35‰ の低塩分水でおおわれ、50m層は 34.14 ~ 34.32‰、100 m層は 34.26 ~ 34.33‰ となって、水深 10 ~ 20m に塩分躍層がみられる。

透明度は 18 ~ 38m で、半分以上の定点が 25m 以上と高くなっている。

**10月**：水温は、0 m層は 9月上旬に比べ 2.4 ~ 4.2℃ 低めとなって 22.1 ~ 23.6℃、50m層は 0.9 ~ 3.5℃ 高めとなって 21.29 ~ 23.05℃、100 m層は st. 4 及び st. 6 が 0.5 ~ 0.7℃ 低めの他は 0.3 ~ 0.9℃ 高めとなって 17.57 ~ 18.81℃ となっている。st. 10の 200 m層には 2℃ 台の冷水がみられる。また、8月、9月と形成された水温躍層は 消失している。昨年同期と比べると、0 m層は 1.6 ~ 2.6℃ 高め、50m層は 0.5

～1.4℃高め、100 m層は1.3～2.5℃高めとなっている。平年と比べると、各層とも“平年並み”か“やや高め”に推移している。

塩分は、0 m層が33.15～33.56‰、50m層が33.62～33.94‰、100 m層が34.12～34.22‰となり、9月上旬に比べると0 m層はやや高塩分水となり50m及び100 m層はやや低塩分水となっている。また、沿岸域では水深20～30mに、沖合域では水深20～50mに塩分躍層がみられる。

透明度は16～24mと9月上旬より低くなっている。

11月：水温は、0 m層は10月上旬に比べ、2.4～4.7℃低めとなって18.8～20.2℃、50m層は1.1～3.9℃低めとなって19.04～21.15℃、100 m層はst.2及びst.4が1.0～1.4℃低め、st.6、st.9及びst.10が0.7～1.3℃高めとなって16.56～19.30℃となっている。st.10の200m層には4℃の冷水がみられる。水深75m付近までは温度差がなく鉛直混合が進行している。また、10m層では水温逆転層がみられる。昨年同期と比べると、0 m層はst.1及びst.3が0.2～0.4℃高めの他は0.6～2.5℃低め、50m層はst.1～st.3が0.1～1.5℃高め、st.4～st.6は0～1.2℃低め、100 m層はst.4が1.1℃低めの地は0.7～2.8℃高めである。平年と比べると、0 m層は沿岸域では“平年並み”から“かなり高め”、沖合域は“平年並み”から“かなり低め”、50m層はst.1～st.3は“平年並み”から“かなり高め”、st.4～st.6は“平年並み”から“かなり低め”、100 m層はst.6が“かなり高め”の他は“やや低め”となっている。

塩分は、0 m層が33.88～34.08‰、50m層が33.74～34.04‰、100 m層が34.00～34.24‰で、水深75m付近までは塩分差がほとんどみられない。

透明度は10～23mで大部分は20m以下と低くなっている。

## 2 漁 況

### 漁況の推移

4月：赤碓の総漁獲量は7.7 t（昨年比\* 86%）で、その魚種組成はメバル33%（2,599 K）、スルメイカ（以後沿岸1本釣のものをいう）28%（2,171 K）、タイ10%（770 K）、サヨリ10%（768 K）等となっている。1隻当たり漁獲量（旬平均した1日1隻当たり漁獲量）は、メバルが19～26K、スルメイカが10～148 K、ヤリイカが中～下旬に11～38K、サヨリが上～中旬に51～61Kとなっている。

泊の総漁獲量は13.9 t（昨年比95%）で、その魚種組成はスルメイカ21%（2,947 K）、メイタガレイ18%（2,471 K）、皮ハギ15%（2,061 K）、タイ9%（1,241 K）等となっている。1隻当たり漁獲量は、スルメイカが中～下旬に40～89K、メイタガレイが5～9 K、サヨリが32～120 K等となっている。

網代の総漁獲量は61.4 t（昨年比42%）で、その魚種組成はスルメイカが99%（61,047 K）となっている。1隻当たり漁獲量は、スルメイカが60～526 Kである。昨年に比べ総漁獲量が減少しているのは、スルメイカ漁獲量の減少によるものである。

5月：トビウオ及びケンサキイカ・ブドウイカ（以後シロイカという）の漁獲がみられる。

赤碓の総漁獲量は18.5 t（昨年比93%）で、その魚種組成はトビウオ44%（8,055 K）、スルメイカ22%（4,132 K）、メバル20%（3,617 K）、シロイカ10%（1,789 K）等となっている。1隻当たり漁獲量は、メバルが17～21K、スルメイカが150～503 K、シロイカは中旬から漁獲があり10～17K、トビウオは下旬から漁獲があり168 Kである。

※ 昨年比 =  $\frac{\text{本年の総漁獲量}}{\text{昨年の総漁獲量}}$

泊の総漁獲量は27.0 t (昨年比188%)で、その魚種組成はスルメイカ51% (13,736 K)、皮ハギ15% (3,979 K)、キス6% (1,628 K)、タイ6% (1,516 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、スルメ

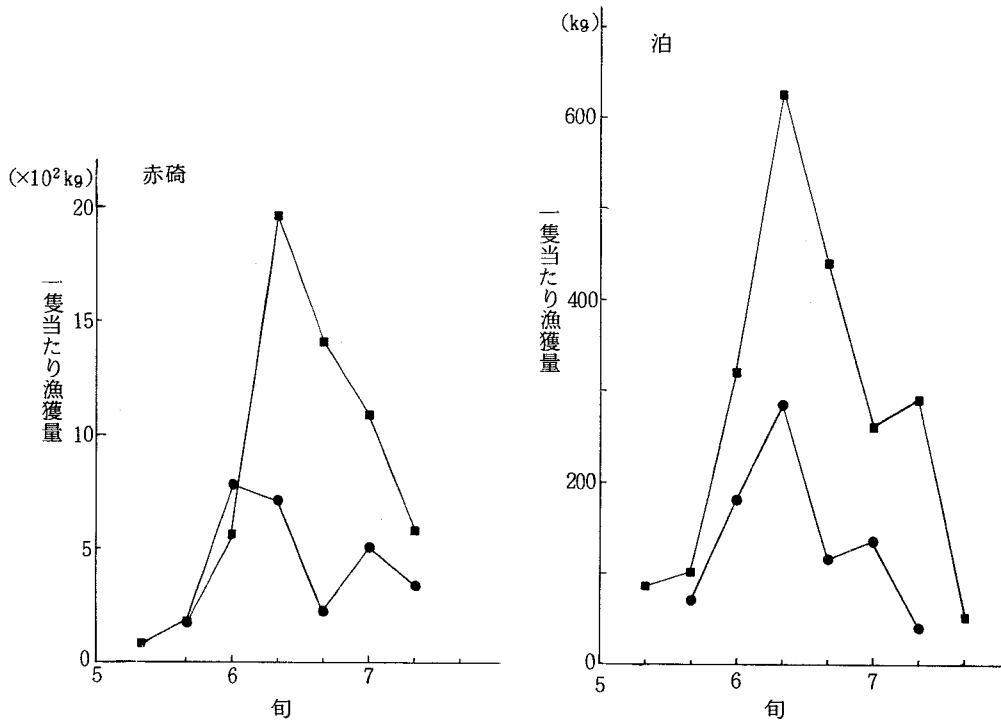


図5 トビウオ漁獲量の経旬変化  
注) ● 昭和三十二年 ■ 昭和三十一年

イカが16~63K、キスが15~18K、タイが2~6Kである。下旬にシロイカが1隻当たり1K、トビウオが70K漁獲された。

網代の総漁獲量は226.4 t (昨年比223%)で、その魚種組成は、4月同様スルメイカが99.6% (225,671 K)とほとんどを占めている。スルメイカの1隻当たり漁獲量は175~341 Kである。

6月：トビウオは盛漁期を迎え、小型底曳網は解禁となる。

赤碕の総漁獲量は94.5 t (昨年比53%)で、その魚種組成はトビウオ81% (76,592 K)、メイタガレイ14% (13,064 K)、シロイカ3% (2,365 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、トビウオが222~782 K、シロイカが11~13K、メイタガレイが33~40Kである。昨年に比べ総漁獲が減少しているのはトビウオの漁獲量減少が原因である。

泊の総漁獲量は48.5 t (昨年比61%)で、その魚種組成はイタヤガイ22% (10,741 K)、メイタガレイ22% (10,513 K)、トビウオ21% (9,982 K)、スルメイカ15% (7,444 K)、ヒラメ6% (2,761 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、イタヤガイが12~24K、メイタガレイが18~21K、トビウオが114~284 K、スルメイカが20~26K、シロイカが2~4 Kである。トビウオが昨年の約1/4の漁獲であったため総漁獲量が減少している。ただ、ここ2年間不漁であったイタヤガイが好漁を示している。

網代の総漁獲量は111.3 t (昨年比131%)で、その魚種組成はスルメイカ97.5% (108,621 K)、シロイカ1.5% (1,773 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、スルメイカが88~131 K、シロイカが1~3 Kである。

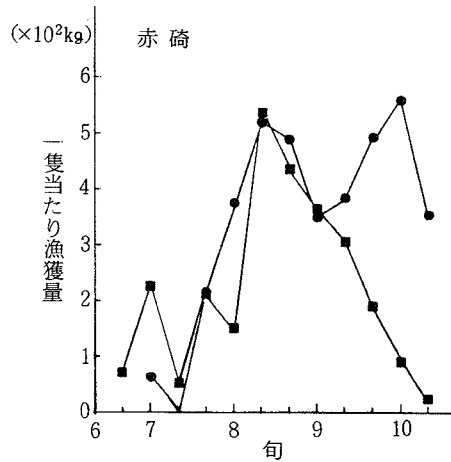
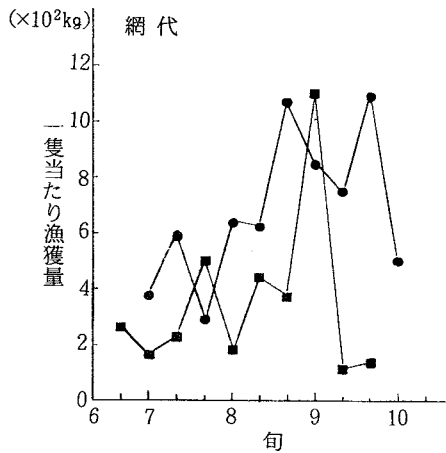


図6 シイラ漁獲量の経旬変化

注) ●昭和52年  
■昭和51年を示す

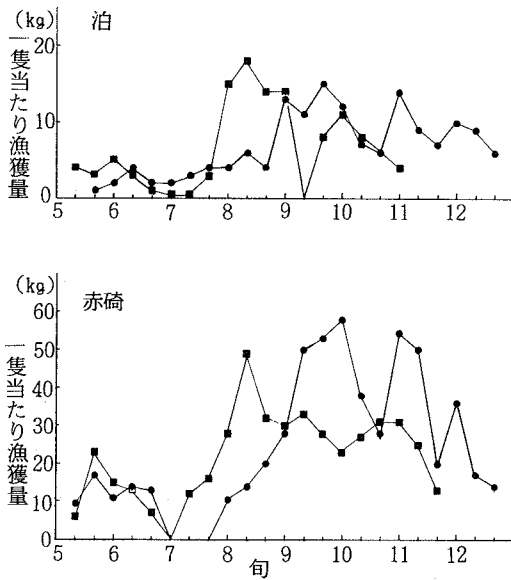


図7 ケンサキイカ・ブドウイカ漁獲量の経旬変化

注) ●昭和52年  
■昭和51年を示す

7月：赤碕の総漁獲量は73.4 t (昨年比83%)で、その魚種組成はトビウオ51% (37,519K)、メイタガレイ21% (15,772K) シイラ9% (6,769K)、スルメイカ9% (6,505K) 等となっている。1隻当たり漁獲量は、トビウオが337~510K、シイラが65~215K、メイタガレイが26~43K、スルメイカが25~39K、ハマチが85~192Kである。トビウオは中旬で終漁となり漁期中の総漁獲量は120.1 t (昨年比57%、平年比\*76%)と不漁であった。また、シロイカは全く漁獲されなかった。

泊の総漁獲量は41.5 t (昨年比104%)で、その魚種組成はイタヤガイ31% (12,714K)、メイタガレイ16% (6,598K)、シイラ12% (4,795K)、トビウオ6% (2,419K) 等となっている。1隻当たり漁獲量は、イタヤガイが21~27K、メイタガレイが12~

13K、トビウオが38~138K、シイラが63~100K、シロイカが2~4K、スルメイカが5~11Kである。トビウオの漁期中の総漁獲量は13,168K (昨年比25%、平年比26%)と不漁であった。

※ 平年比 =  $\frac{\text{本年の総漁獲量}}{\text{過去5年間の総漁獲量の平均}}$

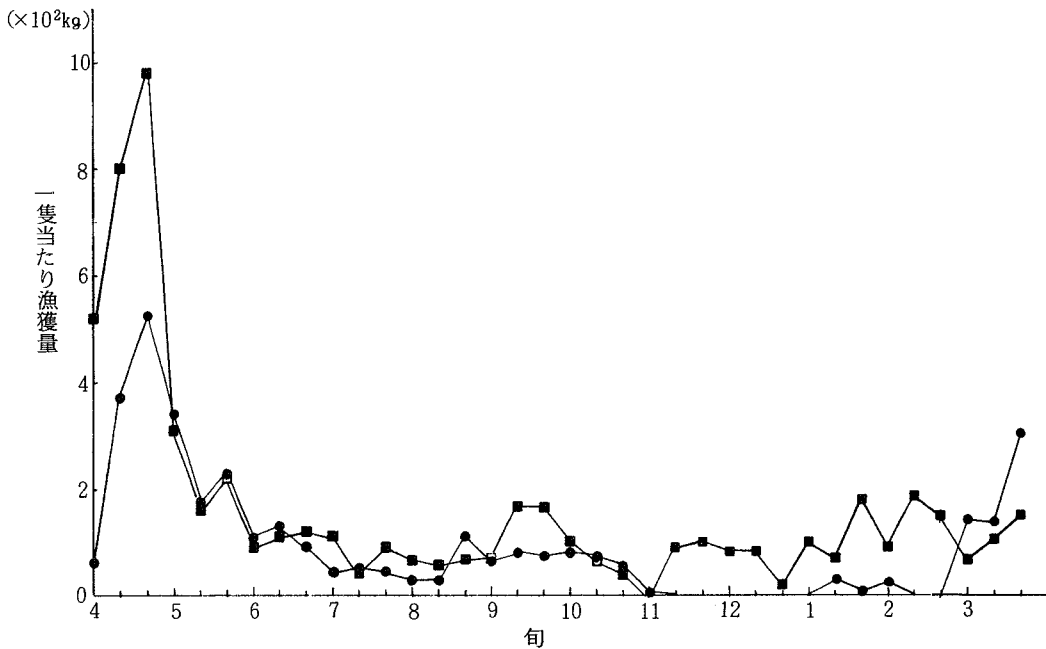


図8 スルメイカ漁獲量の経旬変化

注) ● 昭和52年  
■ 昭和51年を示す

網代の総漁獲量は45.6t(昨年比66%)で、その魚種組成はスルメイカ84%(38,327K)、シイラ14%(6,326K)、シロイカ1%(477K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、スルメイカが44~47K、シイラが287~377Kである。

シイラ漁が各地で上旬から始まる。

8月：赤碕の総漁獲量は51.5t(昨年比85%)で、その魚種組成はシイラ73%(37,625K)、メイトガレイ14%(7,187K)、シロイカ11%(5,668K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、シイラが376~521Kと好漁で、メイトガレイが18~31K、シロイカが11~20Kである。

泊の総漁獲量は42.1t(昨年比141%)で、その魚種組成はイタヤガイ41%(17,273K)、シイラ26%(10,885K)、ヒラメ9%(3,784K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、イタヤガイが34~50K、シイラが84~189K、シロイカが4~6Kである。イタヤガイの多獲が総漁獲量の増加につながっている。

網代の総漁獲量は56.3t(昨年比109%)で、その魚種組成はスルメイカ81%(45,416K)、シイラ19%(10,638K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、スルメイカが下旬に多獲され27~112K、シイラが623~1,069Kで昨年の2.5倍の漁獲量がある。シロイカは総漁獲量が67Kと不漁である。

9月：シロイカが好漁を示す。

赤碕の総漁獲量は66.4t(昨年比157%)で、その魚種組成はシロイカ55%(36,195K)、シイラ44%(29,307K)と両魚種で大部分を占めている。1隻当たり漁獲量は、シロイカが28~58Kと好漁を示し、シイラが349~494Kである。ハマチが下旬に1獲当たり87Kの漁獲がみられた。

泊の総漁獲量は66.4t(昨年比251%)で、その魚種組成はハマチ30%(20,059K)、シイラ24%(16,221K)、



スルメイカ12% (8,143 K)、シロイカ11% (7,511 K)、イタヤガイ8% (5,636 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、シイラが180～292 K、シロイカが11～15K、ハマチは上旬が359 Kであったが中～下旬は7～21Kである。イタヤガイは1～64Kである。イタヤガイの漁期中の総漁獲量は46,364 K (昨年比3387%、平年比55%)である。

網代の総漁獲量は74.7 t (昨年比64%)で、その魚種組成はスルメイカ78% (58,230 K)、シイラ18% (13,517 K)、シロイカ3% (2,238 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、スルメイカが64～79K、シイラが843～1,091 K、シロイカが1～5 Kである。ソデイカが中旬から1隻当たり1～2 K漁獲されている。

**10月**：赤碓の総漁獲量は67.6 t (昨年比318%)で、その魚種組成はシロイカ62% (42,155 K)、シイラ27% (18,504 K)、ハマチ10% (6,460 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、シロイカが28～58K、シイラが355～560 K、ハマチが107～140 Kである。シイラは中旬で終漁となり、漁期中の総漁獲量は、92,205 K (昨年比172%、平年比91%)である。

泊の総漁獲量は37.8 t (昨年比166%)で、その魚種組成はスルメイカ21% (8,065 K)、ハマチ21% (7,887 K)、シロイカ14% (5,421K)、ヒラメ13% (4,794 K)、シイラ11% (4,294 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、スルメイカが9～19K、ハマチが44～78K、シロイカが6～12K、キスが18～32Kである。また、カツオ(ヨコワも含む)が中～下旬に1隻当たり2～10K漁獲される。シイラは中旬で終漁となり、漁期中の総漁獲量は36,195 K (昨年比156%、平年比112%)である。

網代の総漁獲量は57.9 t (昨年比127%)で、その魚種組成はスルメイカ88% (50,978 K)、シロイカ7% (4,290 K)、シイラ3% (1,513 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、スルメイカが55～79K、シロイカが5～8 K、シイラは上旬で終漁となり504 K、カツオが中旬から漁獲され13～22Kである。シイラの漁期中の総漁獲量は31,994 K (昨年比189%、平年比99%)である。

**11月**：赤碓の総漁獲量は28.3 t (昨年比125%)で、その魚種組成はハマチ50% (14,003 K)、シロイカ45% (12,632K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、ハマチが29～270 Kで下旬に多獲されている。シロイカは20～55Kと好漁である。

泊の総漁獲量は13.9 t (昨年比93%)で、その魚種組成はヒラメ38% (5,312K)、シロイカ21%(2,972 K)、ハマチ11% (1,545 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、ヒラメが17～18K、シロイカが7～14 K、キスが11～18Kである。

網代の総漁獲量は6.2 t (昨年比126%)で、その魚種組成はシロイカ68% (4,226 K)、カツオ27% (1,663 K)、スルメイカ5% (319 K)となっている。1隻当たり漁獲量は、シロイカが14～39K、カツオが11～21Kである。

**12月**：赤碓の総漁獲量は17.3 t (昨年比1,284%)で、その魚種組成はシロイカ48% (8,213 K)、ハマチ40% (6,979 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、シロイカが14～36K、ハマチが74～109 K、ヒラメが16～23Kである。シロイカ及びハマチが多獲されたため、昨年に比べ大幅な漁獲量増加となっている。シロイカは終漁となり、漁期中の総漁獲量は109,017 K (昨年比142%、平年比181%)である。

泊の総漁獲量は10.1 t (昨年比91%)で、その魚種組成はヒラメ36% (3,626 K)、ハマチ25% (2,540 K)、シロイカ13% (1,292 K)等となっている。1隻当たり漁獲量は、ヒラメが6～11K、ハマチが8～101 Kで上旬に多獲され、シロイカが6～10Kである。シロイカは終漁となり、漁期中の総漁獲量は19,304 K (昨年比93%、平年比86%)である。

網代の総漁獲量は7.7 t (昨年比71%)で、その魚種組成はシロイカ87% (6,696 K)、カツオ10% (773 K) 等となっている。1隻当たり漁獲量は、シロイカが15~36K、カツオが1~42Kである。昨年9.5 t 漁獲されたスルメイカは漁獲がみられなかった。シロイカは終漁となり、漁期中の総漁獲量は19,767K (昨年比74%、平年比48%) である。

1月：各地区とも荒天・時化等のため、出漁日数は減少し、また、底生魚主体に漁獲し、漁獲量も年間最低期を迎えている。

赤碓の総漁獲量は2.4 t (昨年比119%)で、その魚種組成はメイタガレイ49% (1,172 K)、メバル19% (450 K)、スルメイカ11% (259 K) 等となっている。1隻当たり漁獲量は、メイタガレイが36~111 K、メバルが21~22Kである。

泊の総漁獲量は1.2 t (昨年比96%)で、その魚種組成はタイ38% (458 K)、皮ハギ13% (162 K)、イサキ11% (128 K) 等となっている。1隻当たり漁獲量は、タイが7~13K、イサキが3~4 Kである。

網代の総漁獲量は3.7 t (昨年比43%)で、その魚種組成はヤリイカ57% (2,177 K)、スルメイカ42% (1,575 K) となっている。1隻当たり漁獲量は、スルメイカが12~31K、ヤリイカは中旬のみに漁獲があり46Kである。

2月：赤碓の総漁獲量は0.4 t (昨年比9%)で、その魚種組成はメイタガレイ79% (304 K)、ヒラメ12% (47K) 等となっている。1隻当たり漁獲量は、メイタガレイが76K、ヒラメが12Kで、上旬に漁獲される。

泊の総漁獲量は0.3 t (昨年比5%)で、下旬に底刺網によりタイ、メバル、イサキ等が漁獲されている。

網代の総漁獲量は0.5 t (昨年比11%)で、その魚種組成はスルメイカ84% (500 K)、ヤリイカ16% (93 K) となっている。1隻当たり漁獲量は、スルメイカが25K、ヤリイカが5 Kで、上旬に漁獲される。

3月：各地区とも年間最低期を脱し、漁獲量の増加がみられる。

赤碓の総漁獲量は18.0 t (昨年比156%)で、その魚種組成はメイタガレイ79% (14,213 K)、メバル7% (1,256 K)、サヨリ5% (924 K) 等となっている。1隻当たり漁獲量は、メイタガレイが63~110 K、メバルが23~28K、サヨリは下旬に漁獲があり103 Kである。

泊の総漁獲量は8.0 t (昨年比52%)で、その魚種組成はタイ29% (2,311K)、メイタガレイ22% (1,739 K)、ヒラメ13% (1,036K)、メバル8% (652K) 等となっている。1隻当たり漁獲量は、タイが8~16K、メイタガレイが7~14K、ヒラメが8~12Kである。

網代の総漁獲量は22.8 t (昨年比238%)で、その魚種組成はスルメイカ99.8% (22,742 K) とほとんどを占めている。1隻当たり漁獲量は、スルメイカが138~303 Kである。

以上のことから、7月までは昨年及び平年と比べるとトビウオ、シロイカを中心に低調な漁況で推移したが、8月以降はシイラ漁が好転し、また、シロイカも9月に入り好漁を示した。イタヤガイは、ここ2年間不漁であったが、泊地区を中心に好漁を示した。その他、ソデイカは9月に若干漁獲がみられた程度で、カツオは10月から12月にかなりの漁獲がみられた。